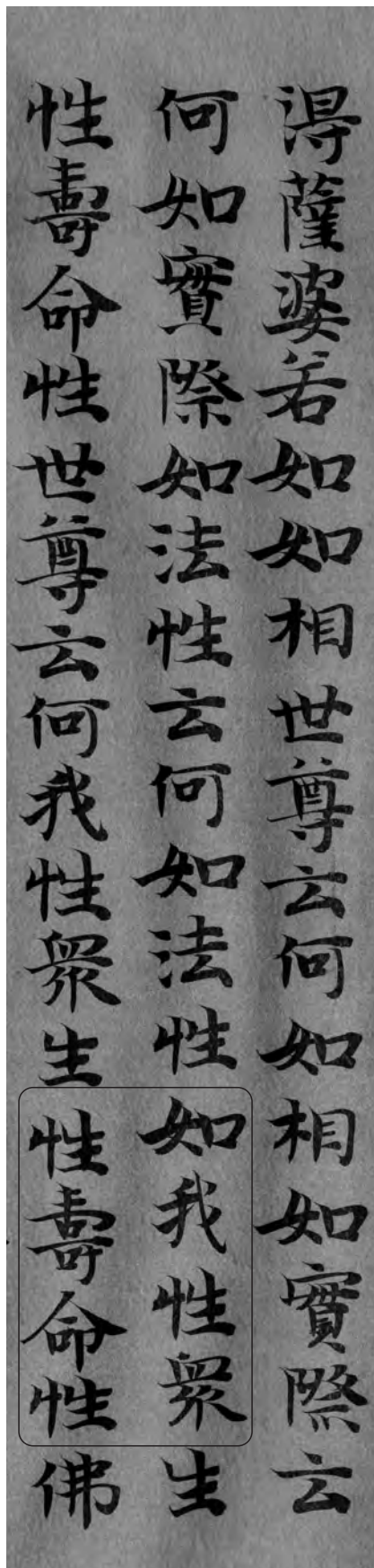


知我性衆

性壽命性



「唐前・写経断簡④」

5～6世紀頃？

「摩訶般若波羅蜜經三慧品第四 七十」ではじまる。巻頭から七紙ほどあり、巻末は失われている。用紙は、大変薄く、黄色を帯び、蠟が塗布され加工されている。これまで余り目にしたことがない用紙である。書風は、巻末に紀年がないので確定することは難しい。文字の結構や用筆から推測するに、唐代の書ではなく、唐前の隋または六朝末の書ではなからうか。北齊時代の作とされる『文殊般若

経碑』の書風に非常に近いものを感じさせる。石刻と写経の文字の比較では、文字の大きさなどの面で大いに異なる要素があるが、試みに共通する数文字を取り出して並べてみた(図③)。両者の文字の結構やゆとりたりした筆勢の運びの趣に通じるものがある。数十年前に、藤枝 晃(1911～1998 東洋学者、敦煌学および西域出土の古写本研究の第一人者)が、国内に流通する敦煌写経の大部分は後世の偽造になるものとの説を出された。これまで示したのも、そうした部類に入るのであろうか。

以前、北京の国家図書館の敦煌文書展で、偽造「敦煌写経」と明示して、展示してあるのを見たことがあり、確かに敦煌写経の偽造品は存在する。しかしこれらとは、明らかに趣が異なるのだが、読者皆さんはどう思われますか。

この欄に関するご批評、ご意見、ご希望、ご質問などをお聞かせください。私宛に直接メールで、また編集部宛にお送りいただければ幸いです。

伊藤滋 メールアドレス

mokei@galaxy.ocn.ne.jp

書道芸術院

平成の群像 (2015)



第67回毎日書道展

80才の老人が木を植えていた。通りがかった若者が「おじいさん、今から木を植えてどうするんだ」と言った。すると老人は「このリンゴの木は、やがて大きくなり、人々が木かげで休むことができる。その実を食べることもできるではないか」と応じた。童門冬二氏の「歴史のおしえ」という著書に出てくる話です。

『たとえ世界の終末が明日であろうとも私は今日リンゴの木を植える』というルーミアニアの作家ゲオルギウの言葉をわかりやすく話したものです。自分も書道の世界に1本のリンゴの木を植えることができるかと思っています。

石川九楊氏が著書「書く」の中で、書

「希望」

土田 詢 扇



の底知れない深みについて考察しています。書字を盛んにして生活の周辺に美しい肉筆の文字をあふれさせるこそ人々が文化的に高度な生活を築き上げる鍵となる。現在必要なことは英語や理数以上に書学教育であり、それが人間としての行き方や情操にまで深く関係していることが明らかになると述べています。私の教室は子供達の数は少ないのですが、指導の「原点」を教えられた気がいたします。

パソコンの普及で肉筆文字が消えそうな昨今ですが、書の奥深さ、やさしさをもう一度皆に知ってもらいたいと思います。

最近の新聞に北海道の公立中学校で初めて「書道科」の授業を導入したという記事がのっていました。将来に希望もてるような気がしました。

「丁寧な字を書こう」という気持は書道以外にも通じる。書道を通して人間的に成長してほしい」と校長先生の言葉。こういう動きがもっと広がることを期待します。高校の書道パフォーマンスも時代の流れの中の一つでしょう。書を好きになった生徒の未来に光明を感じます。

私の人生の中で書道に出会えたことを心から感謝しています。いろいろなことを教えてくれました。考えさせてくれました。その経験と感動を次の世代に希望をもって伝えていきたいと思っています。

書のひろば

理事長 辻元大雲

書道芸術院創立記念日 講演会など諸行事盛況に開催

毎年11月23日勤労感謝の日には我が書道芸術院の創立記念日で、講演会など諸行事が盛況に開催された。

- ・午前中には定例理事会が顧問、評議員各位にオブザーバー参加していただき開催され、諸案件が審議された。
- ・平成27年度補正予算について70回記念事業への積立金830万余円を記念事業費として予算化する。
- ・第69回展、第67回学生展諸日程
- ・創立70周年記念事業について
- ・28年度単位認定大分講習会概要
- ・その他

午後2時から特別講演会開催

・講師 石飛博光先生

・演題「書を奏でるとき」

会場いっぱい約250名の参加者で熱気充満、軽妙な語り口、書にまつわる興味ある内容に観客は惹き込まれる。冒頭から実際に筆を執り、小作品を揮毫されるなど正に多彩で充実した講演であった。

またスペシャル企画として来年の干支「申」をデザインした干支切手シート特別台紙へ今回の執筆者でもある石飛先生と辻元大雲がサインしての販売

も行われた。

続いて開催された創立記念日祝賀懇親会へ石飛先生もご出席いただき賑やかに懇談させていただいた。また、講演時に揮毫された作品を抽選でプレゼントされ、参加者は大喜び。院の各総支局からの近況報告、書展開催のご案内など盛り沢山で盛況であった。



石飛先生をお迎えして大盛況の祝賀会

日本書道ユネスコ登録推進協議会

11月19日 パレスホテル東京にて

「日本の書道文化」をユネスコ無形文化遺産への登録を目指して表記協議会が結成され、準備段階を経て第4回目に全体会議が開催された。

主要構成団体は（公財）日本書美術振興会、（公社）全日本書道連盟、（公財）日本書芸院で、毎日新聞社、読売新聞社、朝日新聞社、産経新聞社、共同通信社など主要マスコミが協力、更に書道国会議員連盟（会長 河村建夫

氏）、松浦晃一郎・元ユネスコ事務局長などが特別顧問としてご就任いただいている。会長は荒船清彦書美術振興会会長、副会長に井茂洞芸術院会員、星弘道全書連理事長、津金孝邦書美術振興会理事長など、全書壇挙げての組織となっている。

委員として全書連事務局長の立場から辻元大雲が指名され今回から会合に出席した。

「日本の書道文化Ⅱ」中でも仮名書道を特筆してⅡという構想でスタートしたがもっと社会性ある内容でないと登録は難しいとの関係者の意見から「書初め」「仮名文字」「年賀状」など生活の中に息づいているテーマを今後検討する方針。既に登録された「和食文化」も当初は懐石料理をイメージしていたが「正月のおせち料理」など一般社会生活に根差した内容に変更された経緯もある。

登録に至る予定は2017年3月に文化庁へ申請、2018年3月のユネスコ申請、2020年秋の登録完了が最短の計画だが、他の分野からの申請がひしめいており、一年に一件しか認められないことから難航が予想される。

さらに運動を展開するための資金をどう確保するか、事務作業を進めるための人的、場所の確保などもクリアしなければならぬ。会員諸氏の強力なご支援、ご協力を切にお願いしたい。諸準備が整い次第関係各団体への協力依頼が参る予定。ポスター、ロゴマー

クなどでの広報活動も計画中である。

2015 中国書法家協会代表団来日

全日本書道連盟の招聘で11月2日、6日まで中国書法家協会代表団が来日された。団長 張海中書協主席、秘書長 潘文海中書協副秘書長ほか4名。

11月4日 中央区立中央小学校6年生書写授業参観。都心の最新設備の小学校で一クラス15名ほどの少人数学級。丁寧な指導に一同感心されていた。

夕刻、毎日書道会の招待宴。糸賀専務理事、下谷洋子・船本芳雲・辻元大雲などが接待、歓を尽くした。

11月5日 午前中は書道用具店買物、午後国立新美術館日展会場にて日中書法意見交換会と書法交流会を行う。参加者は150余名。張海主席、団員の朱培爾中国書法総編集長、日本側から星弘道全書連理事長、仲川恭司全書連理事が意見発表。後日全書連会報に要約を掲載する。書法交流会は中国側張海主席他2名、日本側今村桂山、角元正燦、辻元大雲が揮毫した。

11月6日帰国

申歳干支切手 辻元大雲揮毫



11月初旬全国で販売開始された来年の「申」をデザインした切手を発売中。ご購入を。

漢字 (三)

竹本龍汀

私にとっての書作の原動力は感銘を受けた書にのめり込むマイブームかもしれない。古典でも現代書家の書でも感動し興味を持った作品の真蹟や実物をしっかりと鑑賞して、「どんなところが気に入ったのだろうか?」どんなところが心を惹かれたのだろうか?と、自己分析する。似せよう似せようとする対象の癖をつい学んでしまう。対象のパターンを自分の感覚を通して見つめ、自分が良しとするセオリーのみを見つけて出す。自分の感覚で感動した対象を捉え、対象のイメージを増幅させ、オーバーに表現する。最初に対象から受け

「葉擁西風秋有思。天垂北斗夜無聲。」



「何處秋風至。蕭々送雁群。朝來入庭樹。孤客最先聞。」



竹本龍汀書

た感じを大切に直感で感じたままに書くことを楽しむ。臨書として似ているよりもあくまで最初に感動したイメージを表現できるかにこだわる。同じ法帖の臨書でも見るときに観点が違えば表現は異なってくる。感動によって自分を発見し、臨書で自分表現を学ぶ。マイブームは感動という新発見を書作に繋いでくれる原動力となっている。

今回の作品は、右「葉擁西風秋有思。天垂北斗夜無聲。」

左「何處秋風至。蕭々送雁群。朝來入庭樹。孤客最先聞。」右は秋風と星空、左は秋風と空虚で寂しい空気のイメージで書いた。結果的に右は何紹基、左は良寛の感動イメージに繋がった。

21世紀の書

—私の主張—

かな (三)

小島孝予

無限の可能性——素材選び
かな作品を作る時、まず素材となる短歌・俳句を選ぶ。紙の大きさと共に、散らし書き、行書き等表現も様々である。そして隣合う行との響き合いを考えながら、より効果のある変体がないを取り入れていく。一般的に俳句は、できるだけ変体がない方が好ましい。和歌など古典的なものは、連綿線を多用する。そのようにして季節に合っ

平成27年7月 玉松会14人書展出品作



小島孝予書

た詩歌を選び、どのように全体を表現したいかを明確にした上で、デッサンを積み重ねていく。そこに楽しさと共に生み出す苦しさもある。勉強不足の私は、師から「素材の選び方を考えなさい!」と厳しく指導を受けたものだ。それほど素材選びは大事なのである。同じ詩歌でも各々の創造力によって十人十色、まさに世界に一つだけの作品ができる。無限の可能性の中から生み出される世界——これこそがかな書の醍醐味ではないだろうか。

さて、掲載の作品は小林一茶の句である。ある事に悩んでいた時、莊子の本と出会い「胡蝶の夢」の一節から、苦しい今に向き合う勇気を与えてもらった。そのことを思い、蝶がひらひらと楽しげに飛んでいることを表現したく、紙は方形で、余白を広く、墨色の濃淡によって「蝶もとぶなり」が立体的に見えるよう工夫した。書き終えてふと安堵の思いになった作品であった。

《院関係出品者》

◇和光ホール28人展

辻元 大雲

下谷 洋子

◇セントラル会場100人展

浜谷 芳仙

村野 大仙

飯高 和子

石井 明子

大野 祥雲

小竹 石雲

後藤 大峰

小林 琴水

最首 翠風

坂本 素雪

砂本 杏花

畑中 弄石

現代の書新春展
— 今いきづく墨の華 —

和光ホール28人展
和光本館六階
〒100-0001 東京都千代田区千代田五丁目五番五号
会期 1月5日(火)～11日(月・祝) 午前10時～午後7時
入場無料

セントラル会場100人展
セントラルミュージアム銀座
〒100-0001 東京都千代田区千代田五丁目五番五号
会期 1月5日(火)～11日(月・祝) 午前10時～午後6時
入場無料

和光ホール28人展

会期＝2016年1月5日(火)～11日(月・祝)

午前10時30分～午後7時

(11日は午後5時閉場)

●ギャラリートーク&サイン会 [午後3時より]

6日(水)	8日(金)
永守蒼穹	辻元大雲
10日(日)	11日(月・祝)
遠藤 彊	船本芳雲 松井玉箏

会場＝和光ホール (入場無料)

セントラル会場100人展

— 65歳以上の作家による —

会期＝2016年1月5日(火)～11日(月・祝)

午前10時～午後6時

(11日は午後5時閉場)

●席上揮毫 [午後1時より]

6日(水)	7日(木)	10日(日)
石井抱旦 大林靖芳 町田玄洞	是永尚志 佐久間康之 渡部會山	石井明子 尾崎 學 福田鷺峰

●作品解説会 [午後1時より]

8日(金)	9日(土)	11日(月・祝)
三浦白鷗 百瀬大薫	鎌田恵山 増子哲舟	慶徳紀子 後藤大峰 那須大卿

会場＝セントラルミュージアム銀座 (入場無料)

主 催：毎日新聞社 / (一財)毎日書道会

さいてつぶんこう
祭姪文稿（顔真卿）③

特別研究部臨書課題

Ⅱ（毎日展公募サイズ以内・縦横自由）

当該古典の左記掲載部分以外も可。

漢字研究部臨書課題

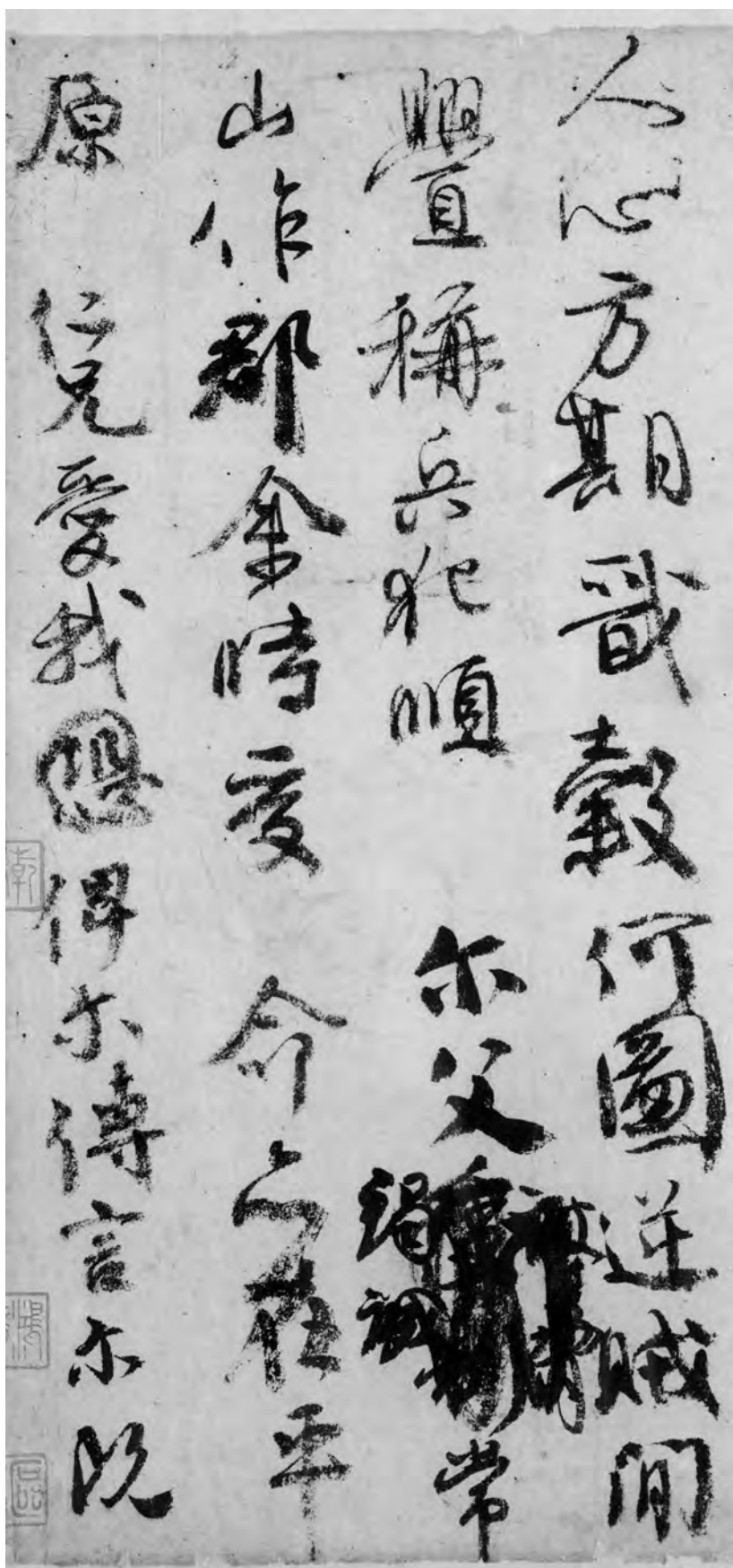
Ⅱ（半紙普通判・縦使用）左記の法帖より何文字臨書してもよい。

〔解説〕顔真卿の行草書には、「祭姪文稿」のほかに「祭伯文稿」〔争坐位文稿〕の名品があり、「顔真卿の三稿」と呼ばれている。また、顔真卿は楷書でも多くの碑文を揮毫した。顔真卿の楷書は欧陽詢・虞世南・褚遂良らによって築かれた楷書の典型に立脚しつつ、独自の風格を加味したものである。蚕の頭のような起筆と、燕の尾のような払いを見せることから、蚕頭燕尾と評され、また、石碑ごとに表情

が異なるなど表現の幅が広く、一碑一面貌と称えられた。顔真卿は、篆書を用筆法を修得し、楷書・行書にとり入れて字形よりも線の重み・強さの表現を重視した。そして、全く新しい書法（顔法）をつくり出し、多くの作品を残した。それは、伝統的な王羲之の書に対して、書法に大きな変革をもたらすものであった。

（編集部）

※落款を必ず入れる
署名、もしくは
〇〇臨
（押印のみ可）



（80%縮小）

人心。方期戮殺。何圖逆賊聞／聳。稱兵犯順。爾父竭誠。常／山作郡。余時受命。亦在平／原。仁兄愛我。俾爾傳言。爾既

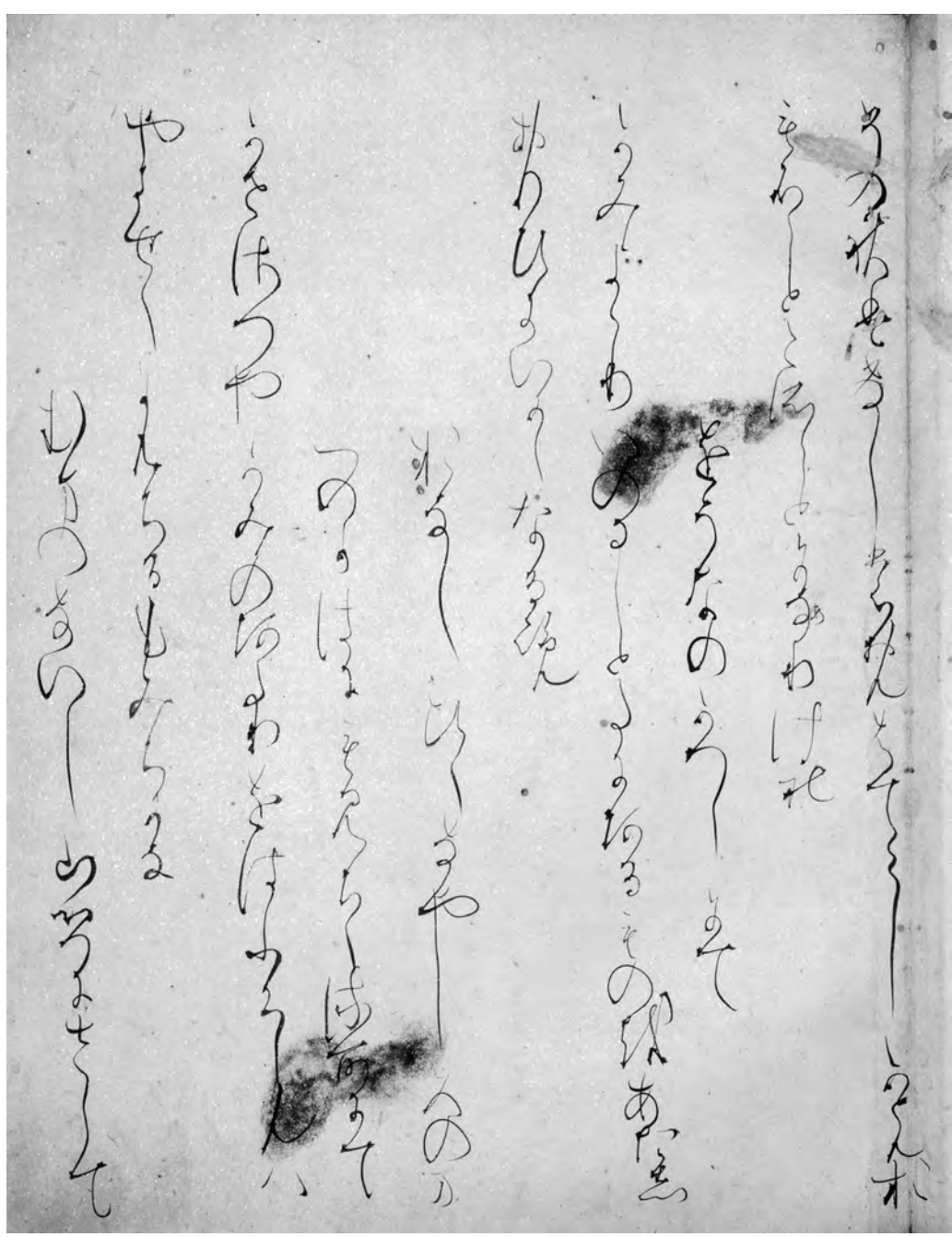
※落款を必ず入れる。署名、もしくは〇〇臨(押印のみも可)

かな研究部臨書課題

Ⅱ (半紙普通判(料紙可)・縦長に使用)
別紙を裁断して貼付可。半懷紙は半紙サイズに切って使用のこと。
左記の古筆の掲載部分より歌一首以上を書く。(全臨も可)

特別研究部臨書課題

Ⅱ (毎日展公募サイズ以内・縦横自由) 左記の掲載以外も可。



(個人蔵)

(※掲載図版は80%縮小)

〔解説〕小島切は、加賀前田家に伝来した四紙八頁の零本(内容の一部が欠けている本)が残っており、もとは粘葉装(糊を使った装丁法)の冊子本である。この前田家旧蔵の粘葉本が最もまとまったもので、現在諸家に分蔵されている枚数は30数葉である。
料紙は鳥の子紙に藍・紫の美しい飛雲を配した上に、細かい雲母砂子を撒いている。美麗な料紙で当時の王朝貴族の好みを反映したものである。
小島切の歌は「斎宮女御集」を書写したものである。「斎宮女御集」は今日40本あまりの伝本が確認されているが、その諸本の中で、この小島切は、最も増補・整理された精選本で、国文学、ことに和歌史研究の上でも貴重なものである。(編集部)

〔よみ〕
その神はさしもおもはでこしかどもお
もふことこそことになりけれ
をうなのかへしにて
かみよりのことだにあるものをあだし
おもひにいかなる覽
おなじひなやしろのま
へのかはに、もみぢる所にて
かせさへやかみのあたりをはぶくらむは
やきせにちるもみぢかな
むまのなしいし、山吹にさして

漢字規定 初段以上 【一月十五日締めきり】 用紙 半紙普通判

大野祥雲 選書

盛年不重来
重來
祥雲之

盛年不重来
よみ (盛年、重ねて来たらず)

書体 自由

習い方解説 (三)

大野祥雲

盛年不重来
(盛年、重ねて来たらず) (陶潜)

元氣さかなな若いときに努力し
学書を重ねておくこと。

「盛」各点画を力強く思いとこ
ろどころ直線を交えてみた。ほこ
づくりは思い切り長くした。

「年」第1画以外は横画、縦画で
構成。そのため各線の筆圧、速度
など少し変えた。

「不」横画をやや右上がりとし、
伸びやかに送筆。左払い、縦画、
最終画まで息長く。安定感のある
文字に。

「重」画数は多いが、年と同じよ
うな点画で構成されている。

「来」4画めまでの点画に対し、
5画めの縦画をゆとりをもって書
き、左右の払いで調和よくまとめ
る。

基礎的な用筆が続き、練度の高
い方には失礼になっています。

漢字規定 秀級以下 【一月十五日締めきり】 用紙 半紙普通判

名越蒼竹選書

家無南物

よみ (家いえに南物なんぶつ無し)

書体Ⅱ楷書

家無南物
蒼竹

習い方解説 (三)

名越蒼竹

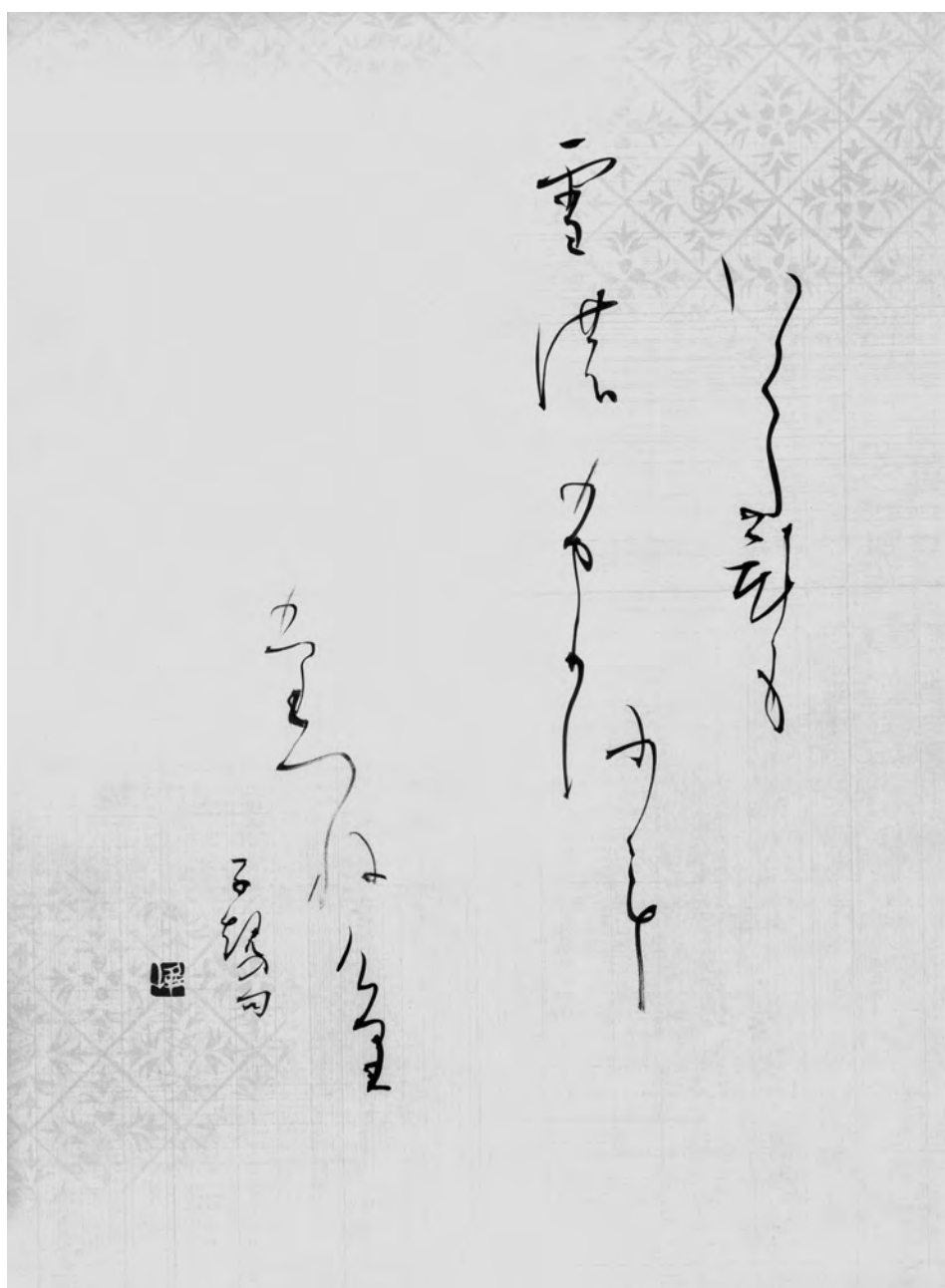
家無南物
(家いえに南物なんぶつ無し)

(宋史)

今月は顔真卿の楷書を参考にしました。言葉の意味は「南方に役人として赴任して帰って来た時、南方の品々を持ち帰らなかった」で、私欲を抱かず、清廉な人間であることを表す言葉です。唐の忠臣であった顔真卿の人柄にも通じる内容なので彼の書風としました。顔真卿の書風といっても「一碑一面貌」と言われるほど様々です。私は特にこれといった一碑の書風にこだわらず、習い覚えた顔真卿全般の書風で書いてみました。起筆・終筆での突き、エンタシス風の縦画、ハネ・ハライの特徴的な部分をマスターしてみてください。

かな規定 初段以上【二月十五日締めきり】 用紙 半紙普通判（料紙可）

平川峰子選書



よみ方 いく(久)た(多)び(飛)も雪の(濃)ふ(布)か(可)さ(沙)を(乎)た(堂)づねけ(介)り(里)

子規の句 創作

習い方解説 (三)

平川峰子

いくたびも雪の深さをたづねけり
(正岡子規)

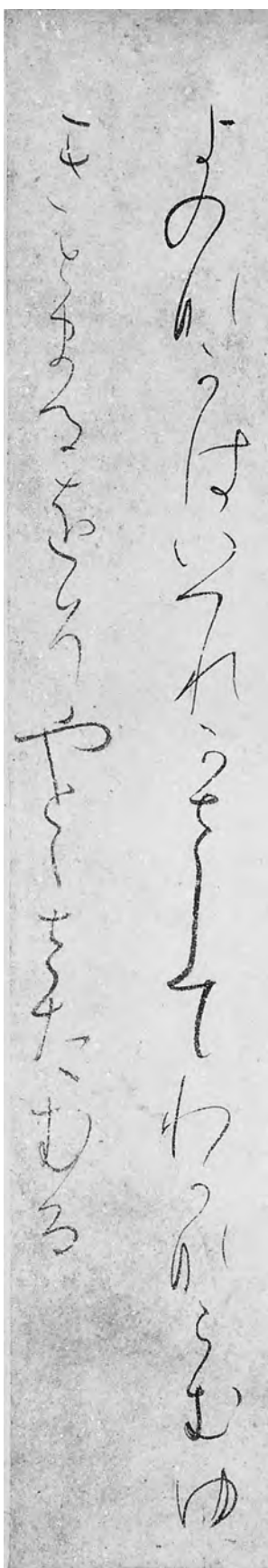
今回の俳句作品は連綿体で書きたいと思い、その使用を多くしてみました。どの字を使おうかと「変体がな字典」を開いて考える時間は楽しいものです。

まず半紙のどの辺りに伸ばせる字を置くかを決めます。粗密を意識して伸ばせる字の隣はだいたい画数の多い字を配置します。この参考手本で注意してほしい字は平です。ここまで草がなになると毛の草書に似てきます。「変体がな字典」を見ると微妙な違いしか有りません。脳から平を書くことを指令することが大切です。変体がない草書です。行書も有りますが草書になった字は同じに見えても字母は異なる場合が有りますので気を付けてください。

かな規定 秀級以下 【二月十五日締めきり】 用紙 半紙タテ1½（料紙可）（たて32センチ・よこ12センチ）

掲載写真のうたを全臨、または部分（二字以上の連綿）を臨書する。

高野 切第三種
（掲載写真縮小93%）

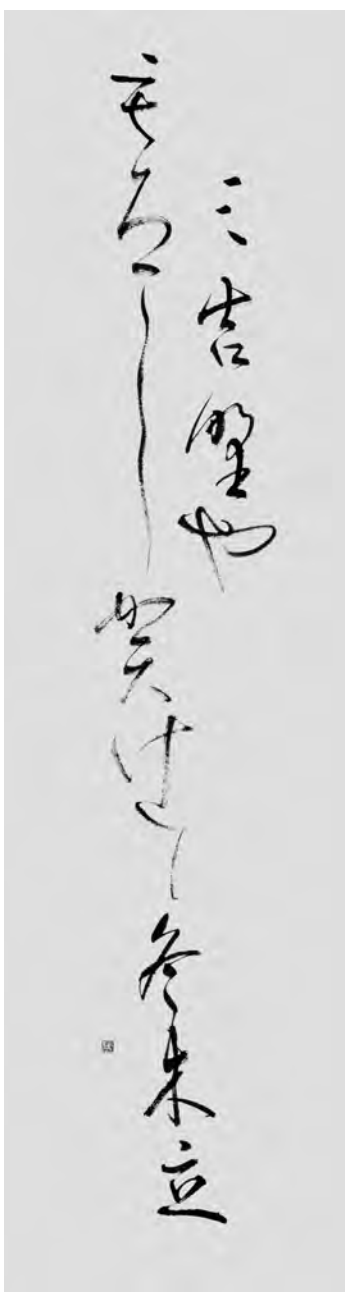


よみ方

よのな(那)か(可)はいづれか(可)さしてわが(可)な(那)らむゆ
きとまるをぞ(曾)やどいさだむる

かな条幅規定 【二月十五日締めきり】 用紙 小画仙紙半切（料紙可）

天海 矩子 選書



よみ方 み(三)よし(吉)の(野)やも(毛)ろこしか(賀)けて冬木立

創作

習い方解説 ③

天海 矩子

みよしのやもろこしかけて冬木立
（与謝蕪村）

1行に4文字を添えた形にして
みました。構成や文字の変換、墨
継ぎの個所を変えたりして、工夫
した作品も試みましょう。
「もろこしかけて」は唐土まで
も遠く続くの意。

※たて形式に限る

漢字条幅規定 初段以上 【二月十五日締めきり】 用紙 小画仙紙半切

辻元大雲 選書

習い方解説 (三)

辻元大雲

天寒古寺游人少 紅葉窓前有幾堆

天寒古寺游人少 紅葉窓前有幾堆 (韓愈)
(天寒古寺游人少なく、紅葉窓前幾堆有る)

書体Ⅱ自由

冬の情景を謳った句です。草書をベースに2文字連綿を数か所取り入れて筆脈の流れある表情を意図しています。草書は時に誤字になりやすく注意が必要です。字典等によく調べるのが大事ですが、普段の古典臨書などで字形や運筆のリズムを会得しておくことが基礎基本です。

※たて形式に限る

習い方解説 (三)

坂本素雪

漢字条幅規定 秀級以下 【二月十五日締めきり】 用紙 小画仙紙半切

坂本素雪 選書

風篁成韻

風篁成韻 (謝莊)
(風篁は韻を成す)

書体Ⅱ自由

—秋風が竹林を吹いて幽けき音を立てる—の意。4文字ですので、ゆったりと大らかに書作して下さい。「風」「成」ともバランスが難しい字です。「風」Ⅱ「一画目のノを余り長くしない事。ノはゆったりと長く引いて下さい。「成」Ⅱ書き順に注意して4画目は弓を張るようにピンと伸ばして長く引いて下さい。成のノをあまり下がないようにして下さい。「篁、韻」は画数が多いので横画の間隔注意。

ペン字規定 【二月十五日締めきり】

小伏小扇選書

習い方解説 (三)

小伏小扇

鳥啼く聲す夢せませ

見よ明け渡る東を空色

映え沖っ邊に帆船群

れ居ぬ霜のうち

鳥啼歌 小扇書

用紙Ⅱはがきの大きさ、白色のもの、黒インク使用のこと

書体Ⅱ自由

いろは歌に替わる歌としての鳥啼き歌です。

この歌は1903年（明治36年）、新聞の公募で一等に選ばれた歌で、日常の書体である「漢字かな交じり文」にあります。

埼玉県児玉尋常小学校校長の坂本百次郎さんの歌です。

意味も味わいながら、一貫したリズムで、最初から最後までを一気に書いてみてください。

※落款を必ず入れる。

（自分の名前を入れること）

木一作品
各部総評

NO. 654

漢字部 師範 菊池 慶輝

筆線紙背に徹る如き厳しさが魅力。空間を大きく把握し、飛燕の動きのようだ。創造への姿勢佳。

◎漢字部総評 上級者中師範の人は参考作品の手習いに終らぬよう。秀級以下は解説中に出て来る古典を法帖等で確認を。
(翠風評)



漢字条幅部 師範 浪川 秋花

木簡風隸書で安定感ある表現。的確な運筆は技術の高さを見せて妙。落款の表情もよい。

◎漢字条幅部総評 上級二行書は参考例による楷書が多かったが平凡作多し。下級一行四字句はバランスが難しかったか。
(大雲評)



現代詩文書部 特選 藤井 美樹

創作意欲に溢れた形で言葉への熱き思いを表現して充実ぶりが伺える。その作品に生命が宿る。

◎現代詩文書部総評 筆の運び方構成に意欲的なのが多くの、今後は楽しみ。
(弄石評)



かな条幅部 師範 萩原 綾子

沈着冷靜な書きぶりが伝えるものは深く床しい。抑制のきいた字は美しい余白となり完成度が高い。

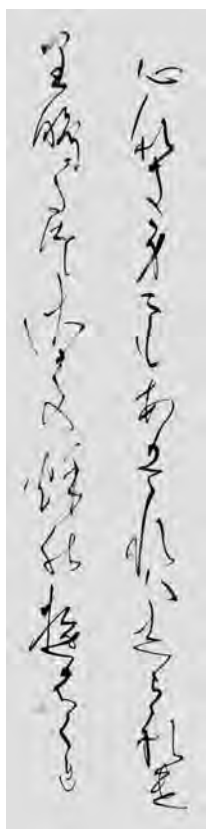
◎かな条幅部総評 過大な字粒、過剰な墨量、無駄な動きで、かな美を損った作品が散見。迫力が汚なさにならぬよう。
(明子評)



前衛書部 特選 阿部 邑里

リヤマかアルパカの乱舞を思わせる発想と下部の線。中央部の渴筆と相まって全体が絶妙です。

◎前衛書部総評 意匠が分かる作品多く、心の内の具象性を感じた。用紙の適性にも留意と工夫を。
(慧香評)



ペン字部 師範 井上 桃李

懐広く、漢字とかなのバランス連綿をうまく表現していて、布置も落款まで統一感があり温雅な作。

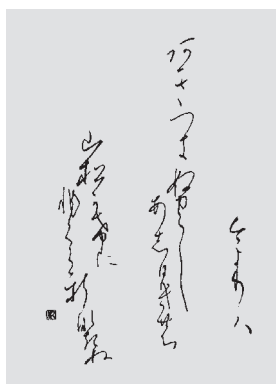
◎ペン字部総評 全体的に流動美と落款まで一貫性のある温雅な作品が多く良い傾向。日頃の古典による勉強が功を奏す。
(和楓評)

三人行えば必ず我が師有り
其の善き者を採びて之に従ひ
其の善からざる者に之を改む
論語述而第七 桃李書

かな部 師範 小野寺久美

手本をよく理解し、バランスよく滑らかに運んでいます。墨色も紙に適い、全て充分な把握で大佳。

◎かな部総評 最終行動きが小さく堅くなったものが多かったが、言葉と文字をよく見極め、とにかく自分のリズムを掴もう。
(洋子評)



特別研究部優秀作品(特選)



森田藤谷書

60×180cm

漢字

(もくせい)

森田藤谷

「月耀如…」

◆長鋒筆を巧みに操り、軽やかなリズムの作。濃墨の艶ある線が魅力、渴筆がやや上すべりの感あり。(大雲評)

◆漢字作品の横形式は流れを出すのが大変であるが、1行3字4字をうまくまとめ上げた。線の立ち上りもよい。(蒼玄評)

◆多様な線質の自在な表現が楽しく伝わる明るい作。行間が美しく、精神、技術共高い作家に脱帽。(明子評)

◆何より全体の空間構成が美しい。自由闊達な筆意で、字形と線質に変化をくり出している秀逸作。(紅瑤評)

臨書

(大雲)

江本興舟 「祭姪文稿」

◆筆の弾力を大いに利用し、ふっくらと肉太な重厚な線質が魅力の作。祭姪文稿の特徴をよくとらえた佳作。

(大雲評)

◆豊かさを感じさせて堂々たる臨書です。拡大して、独自の味わいが加わり筆者自身の作として立派。

(明子評)

◆ねばりのある線質でゆったりとした筆致は顔真卿独特の作風を表現してよいが祭姪文稿の切れは今一步。

(蒼玄評)

◆祭姪文稿の雰囲気をよく捉えている。さらに濃墨を使用し、はっきりとした明快な線、強さがほしい。

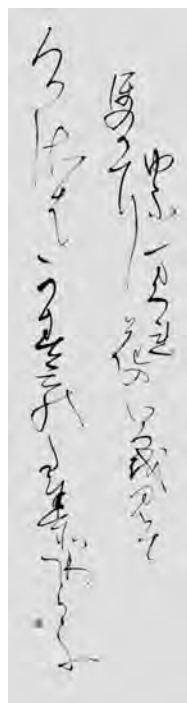
(紅瑤評)

かな

(奥田)

小林純風

「若紫」



小林純風書

135×35cm

◆歯切れよく知的でモダンなかなです。その中に典雅な趣があり、作者の奥深さと幅広さを感じます。(明子評)

◆的確な運筆で安定した作。渴筆がやや不足気味だが、更に細部の冴えと共に練磨を重ねてほしい。(大雲評)

◆ゆったりと空間を包みこむような字形で大らかな作風である。横への動きが大きいのがよどみなく最後までまとめた。(蒼玄評)

◆変化に富む行構成と余白の調和見事。細いが強靱な書線。紙面に緊張感を与えている。リズムが快い。(紅瑤評)



138×70cm

江本興舟臨

現代詩文書 (うるいど)

今 関心華

「言葉」

◆ 自然な流れとゆったりとしたリズムが魅力の作。余白を意識した書きぶりに、今後期待したい。(大雲評)

◆ 優しい字の美しい構成が上品です。墨色の研究により、更に引き出されるものが多いことを期待する。(明子評)

◆ 淡々と書き進んで自然な構成でまとめ上げた。青墨の色も良いが力強さと潤いの変化もほしい気がする。(蒼玄評)

◆ 青淡墨の美しさと穏やかな線が見事に調和。ほのぼのとした優しさ、澄明さが漂う作品となった。(紅瑤評)



今 関心華 書

55×174cm

臨書

(宗苑)

茂木 絢水

「小島切」

部分拡大



135×35cm

前衛書 (紅瑤) 金井みどり 「建」

◆ 何と言っても中央部の側筆の動きが見事である。線の開閉もよく後半部をまとめたが上部は整理が必要。(蒼玄評)

◆ 濃墨と超長鋒から生まれる渴筆が美しい。躍動感溢れる筆致が魅力。さらに緊張感のある構成を指し精進を。(紅瑤評)



金井みどり 書

180×60cm

◆ 二層紙の厚味を生かし、潤いのあるバランスがうまく調和した作。もう少し整理して更に爽やかな作を。(大雲評)

◆ 筆が紙面に生き物を生み出した?と思わせられる。作ったのではない、生まれた作品の魅力全開です。(明子評)

◆ 命毛一本で書かれているような細い線を大事に再現した洞察力は見事です。複雑な動きも美しい。(明子評)

◆ 穂先の良く効く、弾力性に富んだ筆を用い、繊細かつ流麗で淀みない筆致は、見事な調和を見せている。(大雲評)

◆ 小島切独特のからむような字形をよく表現している。細線の切れもよく明るい臨書として仕上げています。(蒼玄評)

◆ 小島切の繊細で流麗な筆線、巧みな連綿等の特徴をよく捉えた努力作。もう少し墨色を濃くし、線に強さを。(紅瑤評)

総出品点数

92点

〈特選候補者〉

〈創作の部〉

「漢字」

恵雅 板橋 雅邦
八街 小川 白柳
「かな」
松延 藤原 三枝子
卯月 新谷 嵐泉

大雲 池田 沙静
八戸 市川 紫泉
もく 西川 藤象

白弦 佐藤 弦佳
「前衛」
月華 中塩 朱華

白珠 高原 紗秀
角田 坂田 翠江
「臨書の部」

「漢字」
書游 庄司 咏艸
陽陽 岩崎 陽光

森地 東平 絹子
大雲 小川 白舟
翠苑 氏家 久光

「かな」
英峰 吉瀬 彩雨

漢字研究部
(祭姪文稿)

選評 小 伏 小 扇

今月のホープ作品



島 貫 琴 燐

漢字研究部 特選 島貫 琴燐

小細工のない率直で直截な運筆を心得ながら、運筆のリズムを整えて、自然な動きで書き切った点が美事です。墨量への配慮も成され、観察力の深さにも敬意を払います。

◎漢字研究部総評

祭姪文稿を、臨書してみますと、見づらい文字が出てきます。誤字の多くみられた文字に、「輕」、「車」、「蒲」などがあります。

形だけを、真似て書くのではなく、行書のくずし方を調べてみて、墨でつづれた部分の正しい筆順を思考する習慣が大切だと思います。

「蒲」の字の点が無い作品も多々ありました。注意深く観察する習慣もつけましょう。



美久玉龍政陽
梢美泉恵夫光



順光桃香靜紅
一燐華風峰苑



景和由舜翠紫
燐敬子水綾泉



星慶菜慶永香
扇子摘燐篁子

